

はじめに

ここ数年間は、特に、「都心居住」あるいは「都市居住」をキーワードとしたテーマについて、議論が活発に繰り返されている。これらのキーワードの背景には、1980年代後半からの、首都圏にはじまる地価の異常な高騰によって、首都圏における住宅事情がこれまで以上に厳しくなったことがあげられる。

最近では、住宅地の地価が下がってきているとはいうものの、一般の賃貸住宅居住者の持家取得が難しいのにかわりはない。

このような状況をふまえて、われわれは、これまでに都市集合住宅居住者を対象に、社会心理学的視点から、都市居住にかかわる態度調査やライフスタイル調査などを研究してきている。それらの調査研究において、中間的所得階層にある都市居住者の中には、持家居住をあきらめざるをえず、住宅の選択態度として、住宅は賃貸であっても実生活の部分でより充実した生活を送ろうという考え方が積極的に現れている。今後は、生涯を賃貸住宅で過ごし、ライフステージに応じた住み替えを行うことで、住要求を満たしていくという居住態度も現れてくるものと思われる。

本研究は、以上の視点にたって、これまでの調査研究で得られたデータを基礎に置き、特に賃貸住宅居住を論点の中心として、都市居住者の住生活にかかわる居住態度とライフスタイルを明らかにすることで、今後の都市居住のあり方を検討するための基礎的なデータを提示したい。

なお、本報告書の執筆分担は次のとおりである。

第1章 穂山貞登（芝浦工業大学）、仁科信春（帝京女子短期大学）

第2章 林 理（東京工業大学）、仁科信春

第3章 仁科信春、林 理、児玉好信（共立女子短期大学）

第4章 仁科信春、穂山貞登、児玉好信

第5章 仁科信春